



>心のエネルギープロセスの中で フェルデンクライスの動きとダンスを経験する<

テーマ: re-Searching Womb/ 'hara': Grounding Challenging Moment/s in ourselves
母胎(子宮)/ 腹を(再)探究する: 困難な瞬間に、私達の中の地に足をつける

講師 カールハインツ・ロッシュ/ 通訳付

ロッシュ氏の「ユニークなエネルギーに満ちた、ダンスアートプロセス」はどなたでも参加でき、自発的・創造的なグループの中、自分自身を体験することができます。自らの身体を「観て、聴く」「観て、聴くことを通して感じる」「観て、聴くことを通して繋がる」という視点から、参加者と共に、探索し、発展していきたいと考えています。自分自身の身体、心、たましいとの繋がりを回復し、人生の「一つ一つのステップ」と共に<One step/ dance beyond>することで、自らの心に耳を傾け、内省することを願います。今回は、母胎、腹からより広げ、おなか、胃、メタボリック、へそ、へそまがり、など、それぞれの想像力をおもいきり使って、探っていきます。

例年、京都文教大学でロッシュ氏はサイコ・エナジェティック（心のエネルギー）・ダンスのワークショップを行っています。このワークではダンスへとつながるモーシェ・フェルデンクライスの「メソッド」: ソマティック(*)な経験としての「動きを通した気づき」「機能的統合」とサイコ・エナジェティック・プロセスを皆さんと経験していきます。(*)ソマティックとは身体と心をつとめること

ユング派「サイコ・エナジェティック」で知られるシェレンバウム, P. にロッシュ氏は学び、アートやセラピーを超えた「ダンスアートプロセス」を展開。パフォーミングアーティストとして活躍する一方、映画製作を行うなど多方面で活躍。フェルデンクライス・プロセスの専門家でもあります。

< The r/e/a/l/ voyage of discovery lies not in seeking new landscapes, but
in having new/ E/y/e/s > (Marcel Proust) [現代社会に、秘境は存在するだろうか]

日時 2013年 11月 30日(土) 10:00 ~ 16:30
(9:00 開場、遅くとも 9:30 までには到着し場所に慣れてください)

場所 京都文教大学 洗心亭・樹心亭(日本家屋のお茶室・大学食堂の裏手)
参加費 9000 円(一般) 7000 円(割引) (定員 15 名まで)
(収入の少ない方や学生の方は割引料金での参加が可能です。ご相談下さい。)

申し込み方法 ワン ステップ/ダンス ビヨンドまで、メールでお申し込み下さい。

持ち物

動きやすい服装。お弁当、飲み物。～ 上記テーマに関連し、また「個人的な問い」に関連する時。

情報と準備 <http://www.kyoto-station-building.co.jp/about/06.html> ワークの前に、京都駅を歩いて、「京都の都市の母胎」を経験してください。改築された JR 京都駅は、設計者原廣司氏によって脱構築され「京都の都市の母胎/マトリックス」として位置づけられたそうです。マトリックスとは「子宮」を意味するラテン語(< Mater 母+ix)に由来する英語 Matrix の音写で、そこから何かを生み出すものを意味します。ワーク終了後、参加者全員で一緒に京都駅に行き、それらを経験します。

参考: 昨年末から今年 2 月まで水戸芸術館で「高嶺格のクールジャパン」という展覧会が開催されました。3.11 を経て、社会問題や人間の深層心理と対峙してきた現代美術家の作品が私達に問いかけています。展示カタログ(*3)も参照下さい。<https://arttowermito.or.jp/gallery/gallery02.html?id=341>

お問い合わせ >One step/ dance beyond~ / わんステップ/ダンスびよんど
E-mail: <dancebeyond@s5.wh.qit.ne.jp> ~ Tel: 090-9103-9949 (多田)



ロッシュ氏は、モーシェ・フェルデンクライスのとなりで、彼の映像を撮った後、フェルデンクライスの創造的学びのプロセスを学び、実践し、ロッシュ氏自身の個性を生かしたやり方で、それを伝えていくことを決めました。(モーシェ・フェルデンクライスは、ただ単純に同じ身体の動きを2回と繰り返すことを決してしませんでした。フェルデンクライスの実践者はアーティストのようにそれぞれの個性を生かし、また禅のようにいつでも「初心のころ」でいることを大切にします。)

参考図書：フェルデンクライス 「心をひらく体のレッスン」 新潮社
シェレンバウム 「愛する人にノーをいう」「愛されない者の傷」 あむすく
濱野清志 「覚醒する心体：こころの自然・からだの自然」 新曜社 (*1)
角田光代 「愛という言葉の向こうにあるもの」 森美術館 LoVE 展カタログ (*2)

文脈 <con/TEXT/lure> 織目

相馬千秋 [F/T13] (*3) 「物語を旅する」 <http://www.festival-tokyo.jp/ft13/concept.html>

“物語は共同体においてのみならず、私たち個人が生きていく上でもなくてはならないものだろう。私たちは普段「わたし」という物語を絶え間なく更新しながら生きているが、そのことを敢えて意識する必要はない：「私（たち）はどこから来たのか？私（たち）は何者か？私（たち）はどこへ行くのか？」”



<他者>の言葉に真に耳を傾けるためには、私たちは「自分にとっての真実」をしっかりと語ることができなくてはならない。<私>にとっての真実を語ること。そうすることではじめて、<他者>の語る「その人にとっての真実」を認めることができる。人は皆それぞれ、“生きた環境”のなかでの主である。そして、けっして他者の主になることはない。・・・そして、主どうしが語り合うことができるとき、たがいの“生きた環境”の創造に参加しつつ、それぞれの“生きた環境”の違いを尊重することができるようになる。
(*1) 参照：濱野清志「覚醒する心体」p14, p191

現代の社会は、この世界の多様性を日常のメディアを通じて目の当たりにしつつ、そこで不必要に他者に共感するより、たがいがあまり干渉しないことを通じて、それぞれ小さな世界で充足するようにしている社会である。そのような状況のなか、この社会で真に求められるのは、理解しがたい遠い<他者>にも耳を傾け、違いに目をそらすことなくしっかりとそれを見据えつつ、その<他者>の生きかたを尊重することである。
(*1) 参照：濱野清志「覚醒する心体」p0

まだ名のつけられていない、未知のもの、それを、まったくあたらしい暗号のような言葉で、人々は共通認識として理解したのである。つまり、言葉が先にあって私たちはものごとを理解しているのではない。未知なるものに私達は言葉を与えて理解しようとするのである。(*2) 参照：角田光代



フェスティバルトーキョー2013 コンセプト 相馬千秋「物語を旅する」より抜粋 (*3)

物語は、人類のあらゆる時代、社会の中に存在している。古くは神話や民話、年代記から、寓話や宗教の教典、小説や戯曲に至るまで、人類は実に多様な物語とともに文明や共同体を築いてきた。実際の出来事に基づくものから奇想天外なフィクションまで、人間の想像力が紡ぎだしてきた無数の物語は、時代や空間を超えて受け継がれ、様々なバリエーションに進化しながら、テレビ、マンガ、ゲーム、コマーシャル、マーケティング、ネット掲示板、都市伝説など現代のあらゆるメディアや語りの中に入り込み、私たちの行動や精神に深く作用している。

また物語は、共同体においてのみならず、私たち個人が生きていく上でもなくてはならないものだろう。私たちは普段、「わたし」という物語を絶え間なく更新しながら生きているが、そのことを敢えて意識する必要はない。だがある瞬間、その物語が何らかの理由で断絶し、継続不可能になったとき――、突然日常に亀裂が入ったとき、大切な人を亡くしたとき、自分の心身が危機に陥ったとき――、私たちはそれまで自分が紡いできた「わたし」という物語の存在とその損失を前に、再び自分自身に問いかけるだろう。「私（たち）はどこから来たのか？ 私（たち）は何者か？ 私（たち）はどこへ行くのか？」と。そして再び、「私（たち）」という物語を紡ぎ始めようとするのではないだろうか。



哲学の世界では、かつてジャン＝フランソワ・リオタールという思想家が「大きな物語の終焉」を提唱し、近代社会を普遍的に規定する価値観や歴史、社会システムといった大きな枠組が相対化された。しかし、それから30年後を生きる私たちは、現実の世界において「大きな物語」が終わることなどないことを知っている。どんなに世界が断片化し、「小さな物語」が無限に乱立しようとも、人々は依然「大きな物語」の不在に耐えることはできず、むしろより単純化され「大きな物語」を捏造し、しがみつこうとする。3.11以後を生きる私たちは、こうした時代の空気感を感じながら、あらためて「物語」の役割と表現について考えていかなければならないだろう。物語とは何か。それを語る主体とは誰か。そもそも、その物語を語る権利は誰にあるのか。単純な共感や同化、同調のための道具ではない物語とはどんなものか。メディア環境の劇的変化にしたがって、物語の生成・消費・再生の有り様も変容した今、演劇というメディアには、いかに物語を語り続ける可能性が残されているのだろうか。

これらの問いと向き合うために、今回のF/Tでは、「物語を旅する」というテーマのもと、時代と空間を超えて様々な物語と出会い直していきたい。…3.11は、私たちに現実が虚構を超えてしまう恐怖と虚無感をもたらしたが、そもそも人類はこれまでも幾度となく、コントロール不能な自然や語り得ない歴史を経験してきたはずだ。その度に人間は、事態を乗り越えて再び世界を構築するために、あらゆる想像力を駆使してフィクションを生み出してきたのではないだろうか。

